

電子時代における図書館観の変容 ：ベイカー論争の再検討を通じて

薬師院 はるみ

Transformation of the Librarianship in the Digital Era
: Through the Reconsideration to the Controversy Raised by Nicholson Baker

Harumi YAKUSHIIN

抄 録

本稿は、2004年10月14日、「都市の発展と図書館サービス」というテーマのもと、上海図書館にて第3回国際図書館学セミナーと合同で開催された第2回国際図書館フォーラムの第4部会「図書館と都市の知識基盤」における発表を和訳したものである。

この発表の目的は、図書館界における情報化傾向の影響を、非技術論的かつ非戦略的な側面から考察することにあつた。すなわち、この傾向の背後で、図書館観および図書館員像が変容しつつあるということに着目したのである。具体的には、米国の作家ニコルソン・ベイカーが、図書館に対して行った一連の抗議活動を追跡するとともに、それらの活動が引き起こした論争についての再検討を行い、この作業を通じて、情報化時代において図書館の世界にもたらされつつある変化についての考察を行った。

その結果、図書館でコンピュータ化が進められたことは、図書館専門職と旧来の図書館愛好家との間に、一種の認識論的な次元での断絶を生み出したことが明らかになった。加えて、この断絶は、旧来の図書館および図書館員の価値評価問題を内包しており、それがベイカー論争の基底をなす係争点であるという事実もまた、合わせて解明された。

キーワード：情報化時代、コンピュータ化、図書館専門職、ニコルソン・ベイカー、カード目録、マイクロフィルム

1 はじめに

今日の図書館は、利用者に対し、有用な情報をより早く効果的に提供すべきだと考えられている。そのため、図書館は、コンピュータ化を進め、新しい情報技術を積極的に取り入れるべきだともいわれている。実際、今日、多くの司書は、新しい技術や機能の導入を通じ、図書館が情報化社会にふさわしいものとなるよう多大な努力を行っており、また、そうした努力は、図書館の価値やイメージを高めると同時に、司書が専門職、特に情報専門職としての全国的な認知を得ることにつながると信じているのである。

だが、未来について真剣に考えようとする、過去への顧慮が犠牲となることもある。そこで、この発表では、情報化時代において、図書館の世界にもたらされるであろう変化、そして、

図書館学の変容を、ニコルソン・ベイカーによって引き起こされた論争の再検討を通じて考察しようと思う。ただし、ここでの関心は、将来的な展望について検証することではなく、むしろ、過ぎ去ろうとしている出来事について考察することにある。すなわち、図書館界におけるコンピュータ化や情報化傾向の影響について、技術論的ないしは戦略的な側面から考察するのではなく、こうした傾向の背後で、図書館および司書という存在に対するイメージが変化しつつあることに焦点を当てようと思うのである。

まず始めに、米国の図書館関係者の間で論争や批判の原因となったベイカーによるエッセイや抗議活動を手短に紹介するとともに、これらの活動に対する反論を概観する。次に、この論争の特徴を指摘するとともに、それらを要約する。その上で、コンピュータ化により、図書館界において、ある種の認識論的な次元での断絶が生じたことを示そうと思う。

2 専門職の遺産としてのカード目録

ニコルソン・ベイカーは、1957年生まれ、ニューヨーク州ロチェスター市出身の作家かつ随筆家である。ベイカーは、これまでに少なくとも9冊の本、すなわち、6つの小説と3つのノンフィクションを発表しており、また、文芸雑誌『ニューヨーカー』の常連寄稿家でもある。

1994年4月、『ニューヨーカー』に、「ディスクーズ」と題した記事が掲載された¹⁾。図書館が、オンライン目録導入後、目録カードを破棄している事態に対し、ベイカーが異論を唱えたのである。目録カードには、電子化された目録には取り込まれていない多くの重要な情報が記されており、従って、図書館は、たとえ既に凍結されているにしても、それらを捨て去るべきではないというのである。ただし、ここでは、目録をカードに戻すべきだとの主張がなされているわけではない。というのも、実際、ベイカー自身、すでにカードのみならずオンラインの目録を頻繁に利用しており、それがもつ検索ツールとしての利点を認めているからである。

ベイカーによれば、カード目録は、専門職としての遺産であり、また、一世紀以上にわたるかつての目録家の苦労を髣髴させる図書館の歴史でもあるという。そのため、紙の目録カードを破棄することは、「近視眼的で反知性主義的な国家的発作」²⁾であり、「アレキサンドリア図書館の焚毀にも値する」³⁾破壊であるとまで述べて、図書館を非難したのである。

後に、エッセイ集『思考のサイズ』⁴⁾にも収められたこの記事は、米国の図書館界に大きな波紋を投げかけた。実際、『インフォメーション・ウィーク』では、同記事の紹介にあたり、「紙でできたカード目録をデジタルの形に変えることに余念がないこの国にあるほとんどの大規模図書館で私たちが見ているものは、いわば、自らが招いたオンライン地獄である」⁵⁾と報じた。スタッドウェルとラストが指摘したように、この記事が図書館学や情報学、あるいは書誌学関係の出版物ではなく、広い購買層を持つ文芸誌に掲載されたことで、広範囲に及ぶ大きな衝撃を与えることとなったのである⁶⁾。

けれども、わずかな例外⁷⁾を除き、たいていの場合、図書館側では、ベイカーの抗議を単なる感傷的かつ無意味で要領を得ないものとして棄却してしまうのが常であった。例えば、当時キャスルトン州立大学図書館長であったパトリック・J・マックスは、「カード目録を破棄して何が悪いのか」⁸⁾と述べて反論した。つまり、「目録カードはすでに有用性を失った検索ツ

ルであり、もはや電子化されたシステムのバックアップとしてさえ役に立たない」⁹⁾というわけである。カリフォルニア大学リベラ図書館の目録課長であったナンシー・E・ダグラスもまた、「ほとんどのカード目録は、永久保存に値するような貴重文書などではない」¹⁰⁾と述べて反論した。それどころか、凍結されたカード目録は実際に相当有害でさえあり、一方、オンライン目録は、カード目録がもつ多くの欠点を克服したずっと優れた検索ツールであると主張したのである¹¹⁾。

要するに、ほとんどの図書館関係者は、単純に、オンライン目録がもつ検索ツールとしての優位性を強調することで反論しようとした。ヘルスタインが述べたように、ベイカーの見解は郷愁を誘うものの、結局は当時の図書館が直面している本当の問題を理解していないとみなされた¹²⁾。換言すれば、ベイカーは単なるラッダイトにすぎず、騒ぎにしてもそのうち治まるだろうと予想されていたのである。だが、この予想に反し、その後も騒ぎは治まらなかった。サンフランシスコのハイテク図書館開館に際し、ベイカーが再び抗議活動を始めたからである。

3 伝統的な役割を犠牲にしたハイテク図書館？

1996年4月、サンフランシスコ公共図書館の新本館が開館した。当時の図書館長ケネス・ドーリンは、この図書館をデジタル時代のモデル公共図書館にしようと試み、新技術の導入を積極的に行った。というのも、新しいメディアであるウェブの世界が、「それ以前のメディアで可能であった全て、あるいは、ほとんど全てを可能にする」¹³⁾と信じていたからである。実際、この図書館は、世界に通用する21世紀の公共図書館であるとの評判を得、来館者も旧館時代に比べて3倍に増えた。加えて、斬新な建物や最新式のテクノロジー、そしてコミュニティーを基盤にした資金調達法などにより全国的な話題を呼んだのである。

ただし、そこには、良い評判だけでなく、悪い評判もあった。新本館開館の約3ヶ月前にあたる1996年1月29日、地元新聞サンフランシスコ・クロニクルは、「図書館が何千冊もの本を処分した」¹⁴⁾と報じた。同新聞によれば、新たに開館する「派手なハイテク図書館で」¹⁵⁾「新しい本の場所を確保しよう」と¹⁶⁾、「何千冊もの古い本や資料が密かに処分するよう命じられ」¹⁷⁾、しかもそれは、資料の再利用をしている非営利団体にも知らせないまま実行されたのだということである。

1996年5月30日に開かれた図書館利用者会議において、ベイカーは、図書館が大量の本を処分したことを非難し、また、カード目録についても保存するよう訴えた。「ドーリンが過去に対する憎悪犯罪を行う以前に図書館にはどんな資料が存在していたのかを示す証拠として」¹⁸⁾、カードを保存すべきだと述べ、同図書館を酷評したのである。その後、ベイカーは、1996年10月14日付の『ニューヨーカー』において、図書館での出来事とそれに対する自分の苦情を詳述した¹⁹⁾。

ただし、この時、目録カードを捨てるべきではないと主張したのは、ベイカーだけではなく、79年間使われてきた図書館のカード目録は、歴史的建造物のようなものであり、コンピュータ以前の時代における欠くことのできない古文書でもあるというわけである²⁰⁾。コックスとグリーンバーグ、そしてポーターが指摘したように、「この論争およびそれにベイカーが関与し

ていたことが全国的なメディアの関心を呼び、その結果、ベイカーは、古い図書館目録や伝統的な図書館の使命を代弁する者として見なされることとなったのである²¹⁾。

例えば、ニューズウィークは、サンフランシスコでの論争を報じ、都市では「図書館の配線をしなおすことにやっきになり、図書館に対する考え方を変えようとさえしている」²²⁾と述べた。つまり、当時の最新式の図書館を、「通信網の張り巡らされた空港」²³⁾、あるいは、「電子化されたテーマパーク」²⁴⁾のようであると形容し、「何かがおかしい」²⁵⁾と述べて、それらに対する違和感を表明したのである。ロサンゼルスタイムズもまた、図書館を最新のものにしようとした時に直面する難題や、「本を集めて巡回させるといった伝統的な役割を犠牲にすることなく公共図書館を情報化時代に適応させること」²⁶⁾の困難さについて論じた。

けれども、ドーリンは批判を真剣に受け止めようとせず、それらを単なる懐古趣味に過ぎないとみなした。すなわち、ベイカーは「サンフランシスコの人々や人々の望んでいること」²⁷⁾を理解しておらず、また、批判者は「およそ6年も遅れすぎている」²⁸⁾というわけである。

図書館に関与する者として、私たちのほとんどは、大方ドーリンと同じような見解を持っているのかもしれない。というのも、私たちが行い続けなければならない最重要課題の一つは、図書館資料を検索したり保存したりするためのよりすぐれたツールを開発して利用者に提供することだからである。そして、私たちは皆、カード目録よりもオンライン目録の方が、経済的で場所もとらず、優れた検索ツールであるとみなしているであろう。一方、カード目録は、そうした理由からいずれなくしていかなければならないと考えていることであろう。加えて、図書館利用者に対しては、紙媒体の本や雑誌だけでなく、今後の世界において大きな可能性を持っている電子媒体の情報をも提供すべきであるというのが、今日の一般的な考えであろう。従って、私たちのほとんどは、ベイカーやその他の批判者を、図書館が新技術を導入したり適用したりすることに対して頑なに抵抗する単なるラッダイトとしてみなすに違いない。実際、新技術というものは、常にある種のラッダイトを伴うものであり、書物でさえ、印刷技術の発明後、一般に普及した時には、非難の的となっているのである。

だが、ここで思い出すべきことは、ベイカーはカード目録を検索道具として残しておきたいと望んだのではないということ、そして、彼もまたカード目録の欠点について気づいていたということである。それどころか、先述のように、ベイカーは、図書館のコンピュータ目録システムを常習的に利用しており、また、自身でも、新しい情報技術を効果的に利用している。例えば、自分の研究にオンライン資料を利用し、あるいは、ウェブを介して美しい写真付のメッセージを世界中に向けて発信している。今や彼の本を電子的に利用することもできるのである。

おそらく、ベイカーにとって、カード目録は単なる検索道具なのではなく、後世に遺すべき、いわば伝統的な図書館に関する自叙伝のようなものだったのである。つまり、ベイカーは決してラッダイトなどではなく、逆に、新しい情報技術を享受し、また、それらを図書館へ導入することについてさえも許容していた。ただし、それは、過去を犠牲にしないという条件の下でということだったのである。

そうであるなら、なぜベイカーは、見解が全く時代遅れな単なる懐古主義者として見なされたのだろうか。換言すれば、なぜ、図書館関係者のうち誰も、ベイカーのように、カード目録

を過去の図書館員による業績、ないしは専門職の遺産とみなして敬意を払わなかったのだろうか。それどころか、有用性を失った旧式の検索道具にすぎないとして軽視したのだろうか。つまり、ここで注目すべきは、図書館関係者と図書館愛好家との間に、ある種の齟齬が存在したということなのである。けれども、その問題について考察する前に、次章では、ベイカーによって引き起こされたもう一つの論争について概観しておくこととする。

4 マイクロフィルムは保存に役立つのか、それとも破壊につながるのか？

2000年7月、ベイカーは、図書館に関する非常に挑発的なエッセイを、再び、『ニューヨーク』誌に投稿した。すなわち、米国議会図書館やブリティッシュ・ライブラリーのような世界の主要図書館が、歴史的に価値のある新聞や雑誌をきちんと保存していないと訴えたのである²⁹⁾。さらにその翌年、『図書館と紙への攻撃』と副題をつけた、非常に論争的な本をも出版した³⁰⁾。なお、この本は、2002年3月に米国の全国図書批評家団体ノンフィクション部門で受賞されている。いずれにせよ、それらに書かれた非難は、米国のみならず英国の図書館界にも大きな議論を引き起こした。というのも、書かれた記録を保存することは、図書館が持つ神聖で欠くことのできない役割の一つだと一般に信じられてきたからである。

もちろん、よく知られているように、物理的存在としての新聞や雑誌は、マイクロフィルム化ないしは電子化された後に処分されることが多く、また、古い書物にしても、場所的理由から、不要になった際には捨てられることも多い。それでも、この時、重要なものは何も失われまいと考えられているに違いない。というのも、どこか他の大規模図書館が、原資料そのものか、少なくともそれらを別の形にしたものを保存していると信じられているからである。

ところが、ベイカーは、偉大な研究図書館が、人々の信頼を裏切っていると訴えた。それらの図書館は、実際には資料をきちんと保存していないというのである。例えば、米国議会図書館やニューヨーク公共図書館等、米国の主要図書館は、同国の過去を記録した貴重な資料を保存していると信じられてきた。ところが、実際には、夥しい数の米国の新聞や雑誌をマイクロフィルム化し、その後原資料を処分しているのだという。ブリティッシュ・ライブラリーもまた、古い米国の新聞を競売にかけたということである。というのも、同図書館には、英国の新聞を保存するように要請されているものの、外国の資料を保存する義務をもたないからである。

一方、ベイカーによれば、古い新聞をマイクロフィルム化することで、原資料自体は破損していくことになるのだという。というのも、マイクロフィルム化に際しては、生産効率を上げ、左右両頁間に影を作らないようにするために、すべての製本がばらばらに切断されることになっているからである。さらに悪いことに、たとえマイクロフィルムのコピーが存在したとしても、それは、すべての内容が保存されているということを意味するわけではないのだという。というのも、それらはしばしば読みづらく、挿絵の色が失われ、時には、記事や一つの号全体までもが欠けているからである³¹⁾。

ベイカーは、「アメリカ出版物の格調高い歴史的文化財」³²⁾を保存しようと、自ら私財を投じ、ニューハンプシャー州ロリンズフォードに、『アメリカン・ニューズペーパー・レポジトリ』という名の非営利団体を設立した。というのも、それが、ここでいう「歴史的文化財」を守る

ための唯一の方法であると考えたからである。

なるほど、ベイカーは、「新聞のサイズは、その内容を経験する上で欠くことのできない」³³⁾ものだと考えてはいるものの、それでも、マイクロフィルム化そのものに異論を唱えているのではない。そうではなく、マイクロフィルムは、携帯に便利で複写も容易であるという理由から極めて有用であり、また、それは、かけがえのない、そして脆い原資料の代替にもなり得るとさえ述べているのである³⁴⁾。けれども、ベイカーの見解によれば、マイクロフィルムもまた永続するわけではなく、それどころか、実際に劣化しつつある。それに対して、保存状態のよい新聞は、図書館員が考えているほど脆くはないというのである。

こうした見解に対し、ピッツバーグ大学でアーカイブや記録物の管理について教えているリチャード・J・コックスは、マイクロフィルムは、問題がないとはいえないかもしれないが、それでも、最良の解決策であると反論した³⁵⁾。そして、「ベイカーの本は、誇張と不正確な情報に満ちている」³⁶⁾と主張したのである。また、そこで示された現代の図書館に対する考え方は、あまりにも古く単純で、「保管や学問等の機能に価値を置きすぎており」³⁷⁾、そのため、この考えは、地域の市民を教育するという19世紀の公共図書館が掲げていた使命にも相当するものであると論じている³⁸⁾。つまり、ベイカーは、たしかに図書館愛好者ではあるものの、「図書館員でも文書家でもなく、従って、これらの機関やそこで働く専門職が行うべきことを全く理解できておらず」³⁹⁾、そのため、「現場の職員が直面している責任の多様性を正確に捉えてはいない」⁴⁰⁾と断じたのである。

これに対し、米国文書館員協議会もまた、「リチャード・コックスによる概観や反応全般について」⁴¹⁾賛同し、ベイカーは図書館を愛しているもののそれを理解していないとの見解を支持した。要するに、図書館の管理は、図書館愛好家が考えているよりもずっと困難で複雑なものであるというのが、図書館関係者の間での一般的な考え方だったのである。

5 結 論

ベイカーは、決して、自分が旧式の考えを持っているつもりなどなかったのであろう。けれども、図書館関係者にとって、それは、完全に時代遅れでノスタルジックなもの以外のなにものでもなかったのである。これらの見解の間に、意見の接点を見出すことは非常に困難であるに違いない。なぜなら、そこには、認識論的あるいは存在論的な次元での断絶が存在するからである。そして、この断絶は、旧来の図書館の価値評価問題を内包しており、それが、ベイカー論争の基底をなす係争点でもあったと考えられるのである。

この断絶は、避け難いのかもしれない。というのも、時代とともに発展して行こうとする志向と、古い遺産を保存するという責務との間には、本質的な矛盾が存在するからである。そして、未来についてあまりにも真剣に考えようとする人は、しばしば、文化的遺産を熱心に愛好する人を時代に後れていると判断する傾向にある。だが、図書館の権利宣言解説文に記載されているように、「図書館員が、……果たすべき専門職としての責任は、排除にあるのではなく、包み込むことにある」⁴²⁾。そうであるなら、たとえ現代主義者にとっては後ろ向きで懐古主義だと思われるようなものも含め、多様な要求や関心について考慮し続けることが、現代の図書

館にとって非常に重要なことだと考えられるのである。

注

- 1) Nicholson Baker, "Discards," *New Yorker* 70 (April 4, 1994) pp. 64-86.
- 2) *Ibid.*, p. 64.
- 3) *Ibid.*
- 4) Nicholson Baker, *The Size of Thoughts: Essays and Other Lumber* (New York, Random House, 1996)
- 5) "Seen in the Media," *Information Week* (April 18, 1994) p. 72.
- 6) William E. Studwell, Elaine Rast, "The Rest of the World Discovers Cataloging," *Technicalities* 14 (September, 1994) p. 2-3.
- 7) Mary Grathwol, "Review of the Complaint of a Catalog (Card) Lover," *Colorado Libraries* 20 (Fall, 1994) pp. 28-29.
- 8) Patrick J. Max, "What's Wrong with Scrapping the Card Catalog?," *The Chronicle of Higher Education* 40 (June 29, 1994) p. A44.
- 9) *Ibid.*
- 10) Nancy E. Douglas, "Debating 'Discards': a Response to Nicholson Baker," *Rare Books & Manuscripts Librarianship* 9 (1994) p. 41.
- 11) *Ibid.*, p. 43.
- 12) Brian A. Helstien, "Libraries: Once and Future," *The Electronic Library* 13 (June, 1995) p. 203-207.
- 13) John Berry, "A 'World-Class' Library: LJ Interviews SF City Librarian Ken Dowlin," *Library Journal* 121 (April, 1996) p. 33.
- 14) Phillip Matier & Andrew Ross, "S.F. Library Tossing Thousands of Books: Shelf-Clearing at Main Branch Assailed," *San Francisco Chronicle* (January 29, 1996)
- 15) *Ibid.*
- 16) Phillip Matier & Andrew Ross, "S.F. Library Agrees to Quit Tossing Books: They'll be Given Away to Nonprofit Groups," *San Francisco Chronicle* (January 30, 1996)
- 17) Matier & Ross, "S.F. Library Tossing Thousands of Books," *op. cit.*
- 18) Leonard Kniffel, "Criticism Follows Hoopla at New San Francisco Library," *American Libraries* 27 (August, 1996) p. 12.
- 19) Nicholson Baker, "The Author vs. the Library," *New Yorker* 72 (October 14, 1996) p. 50-62.
- 20) Torri Minton, "Low-Tech Library Users Revolt: They Want S.F.'s 79-Year-Old Card Catalog Preserved," *San Francisco Chronicle* (August 7, 1996)
- 21) Richard J. Cox, Jane Greenberg & Cynthia Porter, "Access Denied: the Discarding of Library History," *American Libraries* 29 (April, 1998) p. 57.
- 22) Laura Shapiro, "Libraries: a Mall for the Mind," *Newsweek* 128 (October 21, 1996) p. 84.
- 23) *Ibid.*, p. 85.
- 24) *Ibid.*, p. 86.
- 25) *Ibid.*, p. 85.
- 26) Mary Curtius, "Write New Chapter: Across the Nation, Beloved Institutions are Trying to Balance Technology and Tradition," *Los Angeles Times* (February 1, 1997)
- 27) Norman Oder, "'Discard' Charges Roil Dowlin's 21st-Century Library," *Library Journal* 121 (August, 1996) p. 14.
- 28) *Ibid.*

- 29) Nicholson Baker, "Deadline," *New Yorker* 76 (July 24, 2000) p. 42-61.
- 30) Nicholson Baker, *Double Fold: Libraries and the Assault on Paper* (New York, Random House, 2001)
- 31) Baker, "Deadline," *op. cit.*, p. 49.
- 32) "American Newspaper Repository Original Home Page," http://home.gwi.net/~dnb/former_newsrep.html
- なお、ここで保管されていた全資料は、2004年の春よりデューク大学図書館にて適切に保存され利用に供されることとなった。
- 33) Baker, "Deadline," *op. cit.*, p. 49.
- 34) *Ibid.*
- 35) Richard J. Cox, "The Great Newspaper Caper: Backlash in the Digital Age," *Collection Building* 20 (2001) p. 90.
- 36) Richard J. Cox, *Vandals in the Stacks?: a Response to the Nicholson Baker's Assault on Libraries* (Westport, Conn., Greenwood Press, 2002) p. 5.
- 37) *Ibid.*, p. 20.
- 38) *Ibid.*, p. 21.
- 39) *Ibid.*, p. 6.
- 40) *Ibid.*, p. 20.
- 41) The Society of American Archivists, "SAA Council's Response to Nicholson Baker's Double fold," <http://www.archivists.org/statements/council-doublefold.html> (May 7, 2001)
- 42) American Library Association, "Diversity in Collection Development: An Interpretation of the Library Bill of Rights," <http://www.ala.org/ala/oif/statementspols/statementsif/interpretations/diversitycollection.htm>

なお、今回の和訳には、以下からの引用を用いた。

アメリカ図書館協会知的自由部編纂 (川崎良孝、川崎佳代子、村上加代子訳) 『図書館の原則 改訂版: 図書館における知的自由マニュアル (第6版)』日本図書館協会, 2003.1, p. 119.